

スポーツ選手の精神適性（6）

— 自転車選手（適性組）の人柄類型と競走成績について —

中山 勝 廣（本学助教授）
 渡 辺 隆 嗣（産能大学）
 藤 江 学（桐蔭横浜大学）
 吉 鷹 幸 春（桐蔭横浜大学）
 増 地 克 之（桐蔭横浜大学）
 星 野 隆 助（明治大学）
 竹 信 武（東京工業高等専門学校）
 黒 田 一 寿（東京工業高等専門学校）

Study on Psychological Aptitude of Sports Athletes (6)

Case Study for Tekisei-gumi of Keirin Players About Personality Type and Score of a Bicycle Derby

NAKAYAMA Katsuhiko, WATANABE Takashi, FUJIE Manabu, YOSHITAKA Yukiharu,
 MASUJI Katsuyuki, HOSHINO Ryusuke, TAKENOBU Takeshi, KURODA Kazutoshi

1 はじめに

スポーツ選手の精神特性を課題とした先行研究として、これまでにラグビー¹⁵⁾、バスケットボール¹²⁾、柔道⁹⁾、バレーボール¹⁾、スキー¹³⁾ 選手等を対象に、日本体育学会及び日本スポーツ心理学会等各種学会で報告発表が行われてきた。

筆者らの研究グループでは、これまでにスポーツ選手（自転車選手）の精神適性について、内田クレペリン精神検査（以下U-Kテストと表記）及び矢田部ギルフォード性格検査（以下Y-Gテストと表記）を用いて調査し、日本スポーツ心理学会において発表（口頭およびポスター）を続けてきた。第1報（竹信 1996）で自転車選手の人柄類型と精神健康度の特徴を概観し、第2報（渡辺 1997）で人柄類型及び精神健康度の分布及び体力と競走成績等の関連について報告した。第3報（吉鷹 1998）では、比較のおとなしいと思われる1群（おだやか型、神経質型、温和型、内的安定型）の選手を対象に、また第4報（中山 1999）で

は粘り強い性格の第2群（じっくり型，地道粘り型，粘着型）の選手を対象に，第5報（黒田 2000）は自己中心的であったり，選り好みをはっきりしている選手を対象に第4群（分裂型，自己顕示型）の人柄類型に着目し，卒業後の競走成績経過との関連について報告した。

近年オリンピック種目にも正式採用された自転車競技について，現役選手として競技寿命が長いといわれ，また最もプロ意識を持った競輪選手に適する人柄とは存在するのか，またあるとすればどのような様な類型なのかを明らかにしようと試みたものである。これは，長期間継続して競走成績に関する資料が入手できることと，実力が即成績（＝賞金）となって表れるプロとして名誉と生活を懸けて競技に集中している選手の性格特性との関連を追跡調査していくことが可能であると思われるからである。

今回は適性組と言われ，競輪学校入校前に自転車競技の経験がなかった者が，自転車に対する運動能力に対する適性試験を経て入学した選手（各期5名）について，人柄類型を基に，競輪学校卒業後の競走成績との関連から見えた人柄の特徴について報告する。

2 方 法

1) 対象，調査期間及び場所

調査対象は日本競輪学校第77期生（77名），78期生（74名），79期生（73名），80期生（75名），81期生（74名）の合計373名である。今回は全入学生の中から適性組として入学した25名を選抜して対象としたが，うち卒業後の競走成績が継続的に把握できている選手21名とした。また，U-K及びY-Gテストは1996年2月から1998年7月にかけて日本競輪学校において行った。

2) 調査項目

競輪選手の人柄類型を判定調査のために，U-Kテストを2回（入学時と卒業時）実施した。また，U-Kテストの判定を裏付ける時の補助的資料としてY-Gテストも実施した。U-Kテストの判定は小林の方法により行い，Y-Gテストは通常行われている方法に従って行った。

競走成績は，日本自転車振興会発行の月刊誌「競輪」より，1997年7月号から2001年7月号までの競走成績記録表から今回研究対象となった選手達の競走成績をピックアップし，研究用に集計したものを使用した。

3 結果と考察

先ず，競輪選手とは，また適性組とはどのような集団なのかについて概略解説する。

競輪選手になるには，日本競輪学校（静岡県修善寺）に入学して約1年間に渡る訓練を受

け、競輪選手として必要な知識、技能の修得が義務付けられている。

競輪学校受験資格は、日本国内に居住している男子で、高校卒業程度の学力を有し、満17歳以上24歳未満（特別試験制度もあり、これは応募前2年間に国際的なスポーツ大会で優秀な成績を収めた者については29歳まで）であれば何回でも受験できる。

自転車競技の経験がある者が受験する技能試験は、自転車の200 mと1000 m走行タイム、学力試験、身体検査、人物調査による試験が実施され、これらを技能組と称している。（昨年度倍率は約11倍）また、自転車競技の経験が無い者が受験する適性試験は、垂直跳びと背筋力、台上走行試験装置による瞬間最高速度、一定時間の総仕事量、最大回転数、学力試験、身体検査、人物考査等の試験が実施されている。これらは適性組と称され毎回約5名が合格している。（昨年度倍率は26倍）

適性組は技能経験がないことから、技能組より約1ヶ月早く入学し訓練を受けることになっている。

日本競輪学校は全寮制教育（禁酒・禁煙・携帯電話も所持禁止）を採っており、学科、実技（訓練期間の前半を基礎訓練期間として、ダッシュ力、持久力、スピードの強化を行い、技術的に競走に適応できるように安定した走行技術を習得し、後期は競走訓練が主体となり競走規則に適応したレースが出来るように指導を受ける。）および特別教育活動のカリキュラム3本柱で構成されている。プロの競輪選手として競走に参加するには、選手資格検定（国家試験）をクリアした後、B級（約1,500名）2班に格付け配属されて登録される。以後競走成績によってB級1班へ昇級し、さらにA級4班から3・2・1班へと（約2500名）昇級し、更にS級（約440名）3・2・1班（130名）へと特進していくシステムとなっている。現在は総勢約4300名前後が登録選手として活躍している。

1）適性組選手の人柄類型と精神健康度の分布

図1は競輪選手全体（373名）の人柄類型と精神健康度の分布を示したものである。8「分裂型」が96名（25.7%）と最も多く、ついで10「粘着型」66名（17.7%）、3-1d「じっくり型」54名（14.5%）、1「おだやか型」42名（11.3%）と続いている。「強気敢行型」は見られず、「朗らか型」はごく少数（3名）である。

今回対象となった21名のU-Kテスト及びY-Gテストより、人柄類型は1（おだやか型）が最も多く6名、以下8（分裂型）4名、10（粘着型）3名、3-1d（じっくり型）、5（地道粘り型）と続き、3-1（朗らか型）、4（強気敢行型）7（内的安定型）、9（自己顕示型）等の類型は該当者が見られなかった。

適性組に属する選手の総数が少ないため、詳細な比較検討することは適切ではないと思われるが、どちらかと言えば立ち上がりはやや遅いが、堅実で粘り強さを持ち合わせている選手が多くみられる。また、選択性が強く個性を主張する選手も多くみられるようである。

また、これら競輪選手の人柄類型の構成割合は、藤江らが調査した一般大学生の分布と上

位2類型については同様の類型が多いことを示しており、性格的な特徴としては、どちらも“とりつきは遅いが粘り強さがある”ということから、競輪選手も大学生も同傾向の人柄を持つ集団構成であるといえよう。

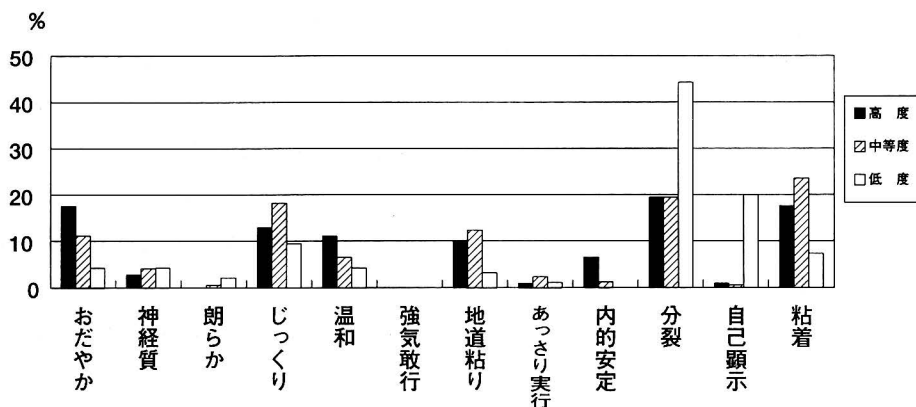


図1 競輪選手の人柄類型と精神健康度

適性組選手の精神健康度の分布を表1・図2に示した。精神健康度の高度者は33.3%，中等者度47.6%，低度者19.0%の割合であった。表1より自転車選手全体の精神健康度の割合は，高度者が108名29%，中等度者が170名45.6%，低度者が95名25.5%であったので，適性組はどちらかと言えば精神健康度の高い選手が多く低度者が少ない集団であるといえる。

精神健康度について小林²⁾³⁾は、「精神の健康とは，ただ単に病気でないという平穩無事のことだけを指すのではなく，もっと積極的，意欲的に，もっと望ましい状態において事故や環境に適応することであり，また積極的，意欲的に，いかなる環境下においても，くじけず，粘り抜くことであり，知的にも情緒的にも，自己を恒常的にも保持しうる姿である」としている。従って，体質的に規定された先天的に不変な「人柄類型」と環境の状態によって変化する「精神健康度」という概念から，それぞれの性格類型の持つ性格傾向の現れ方は，その時々々の精神の「健康状態の如何」によって左右されるということである。健康度の度合いについて，個々人の性格特徴が良い方に出るか，ネガティブに表れるかに関係してくるといえよう。

図3は大学生と中学生および競輪選手の精神健康度分布状態を示したものである。

これらも藤江らが調査した大学生の健康度に占める割合<高度者(33.6%)・中等度者(57.9%)>とはほぼ同様な数値傾向を示したが，低度者は大学生では8.5%程度であるのに対し，競輪選手はその割合が25.5%と高いことが特徴である。これは中学生の低度者が中等度者と同じくらいの多さであり，小林の説明による“学齡的な構成割合(低度者は学齡が進むにつれ10-15%位になる)”からは大きくはずれていることになる。しかし，このことは同時に先程の小林による「専門的特殊な才能が必要になれば，直接精神健康度との縁が薄くなっていく」とこの現れではないかと解釈できる。

表 1 適性組人柄類型と精神健康度の分布

類型	名 称	高 度	中 度	低 度	
1	お だ や か	3	2	1	6
2	神 経 質			1	1
3-1d	じ っ く り		2		2
3-2	温 和	1		1	2
5	地 道 粘 り	1	1		2
6	あ っ さ り 実 行		1		1
8	分 裂	2	2		4
10	粘 着	2	1		3
	適 性 組	9	9	3	21
	選 手 全 員	108	170	95	373

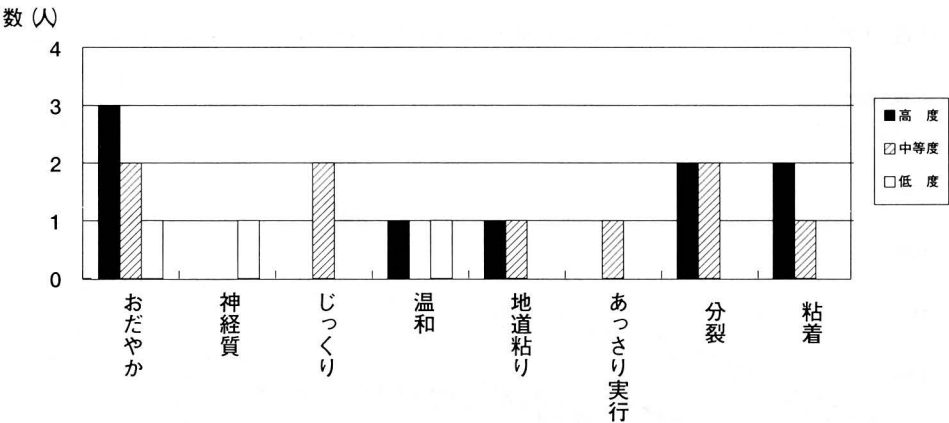


図 2 適性組 人柄類型と精神健康度

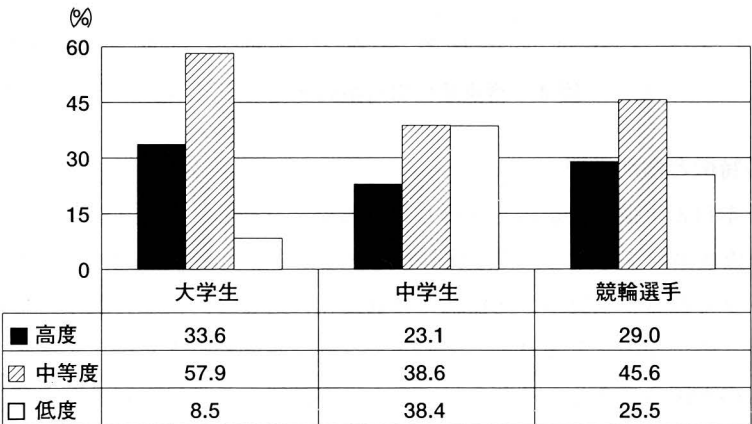


図 3 健康度の比較

2) 競走成績との関連

適性組と技能組を含めた全選手の卒業後の競走成績を、時間経緯に伴う変化として図4に示した。この図から、適性組の競輪競技独特の技能が不足していることが得点順位に如実に現れていることが伺える。全体傾向でも競走回数を重ねるにつれ順位を上げてきているが、技能組との差は確実に縮まってきている傾向が伺える。このことは、適性組が実践デビュー当初は持ち前の体力勝負だけであったが、自転車競走特有の競走技術を経験的に身につけることによって、やがて勝負に勝てるようになって来ていることが推察出来る。なお、競輪選手で最も多い類型である「分裂型」の競走成績を時系列変化で見ると、選手全員の平均線とはほぼ同様な経緯をたどっていることが明らかである。そこに、適性組で多く見られる「おだやか型」と「分裂型」の競走成績を重ねて見ると、競走回数を重ねるにつれ「分裂型」が急速に競走成績を上げてきていることが伺える。このことは分裂型の特徴である“物事へのとりつきは遅いが、いったん気に入って取り組むと凝り性である”との現れと推察できる。

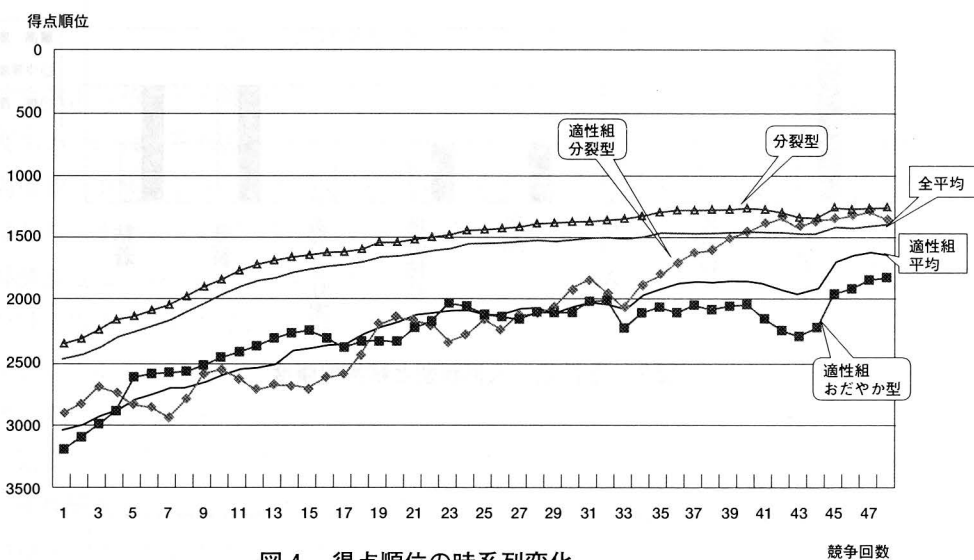


図4 得点順位の時系列変化

3) 適性組の特徴と個別事例

図5は、日本自転車振興会が毎月発行している機関誌から、各選手の競走成績(77期から81期生分)を抜き出し集計して、得点化したものをもとに作成した適性組個々の得点順位経過を示すグラフである。全員の平均曲線の移動変化に対して、個々の選手の得点順位の変化に注目すると、幾つかのまとまりとしてパターン化(集団)出来ることが見えてきた。それを分類したものが図6である。それらは、A:平均曲線より常に下回った成績で推移している選手、B:当初は平均曲線より低い位置にいるが、徐々に上方に変化し成績向上している選手、C:デビュー当初は好成績であるが、徐々に低下して平均曲線以下に成績が降下している選手、D:常に平均曲線より上方の好成績で推移している選手、E:平均曲線に対し上

下に大きな変化をし、成績のばらつきが見られる選手の5パターンに分けられよう。図7は成績変化のパターンと精神健康度の分布を示したものである。事例が少なく関連性については一言では断言できないが、競輪学校卒業時に精神健康度が比較的良好と判定された選手が、実践デビュー当初から競走成績も比較的良好な傾向が伺えよう。

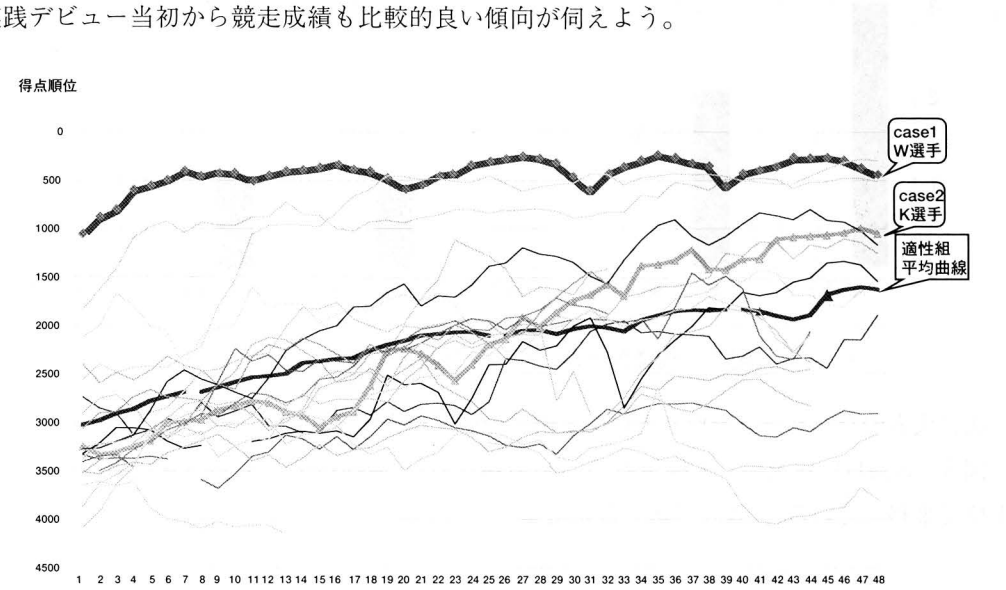


図5 適性組の競走成績個人別推移

競走回数

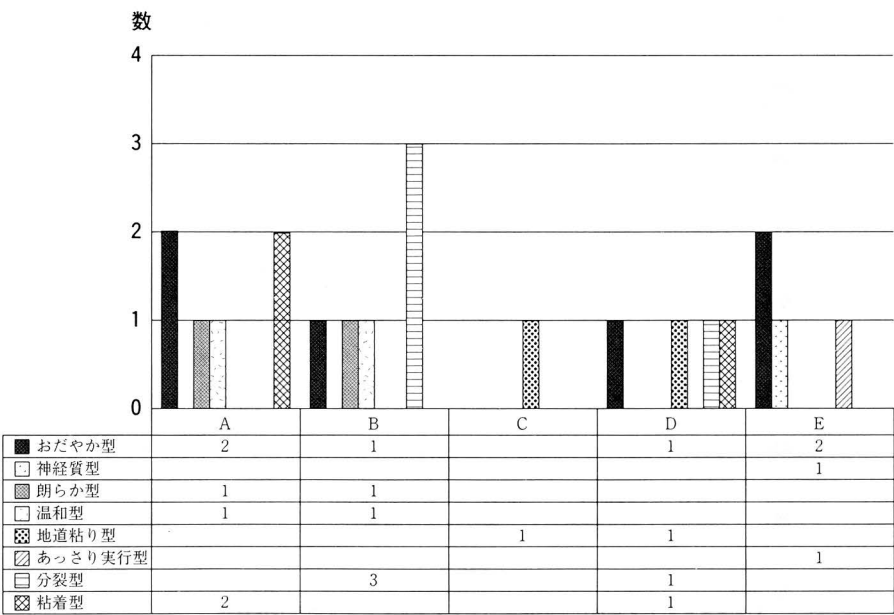


図6 人柄類型と競走成績のパターン

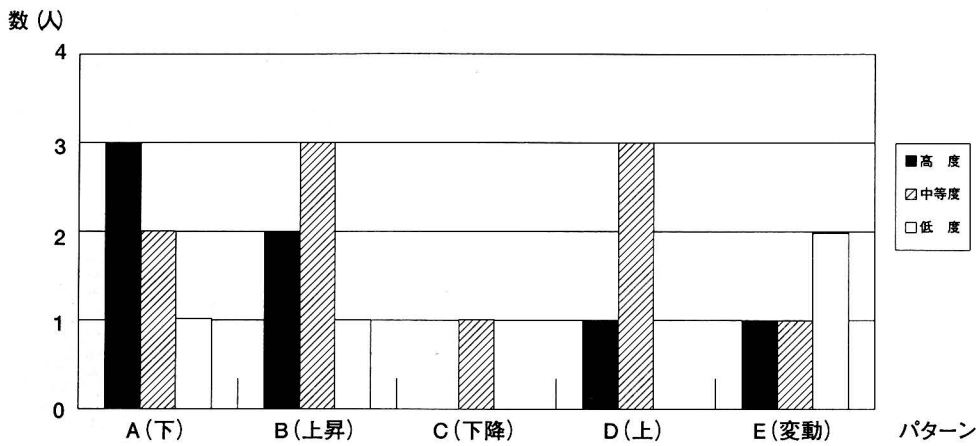


図7 成績変化のパターンと精神健康度

次に代表的なパターンを取り上げ、事例について紹介する。

図8 case1) W選手 人柄類型 5 (地道粘り型), 曲線パターン D (常に平均より成績上位で推移している), 現在S級2班に所属

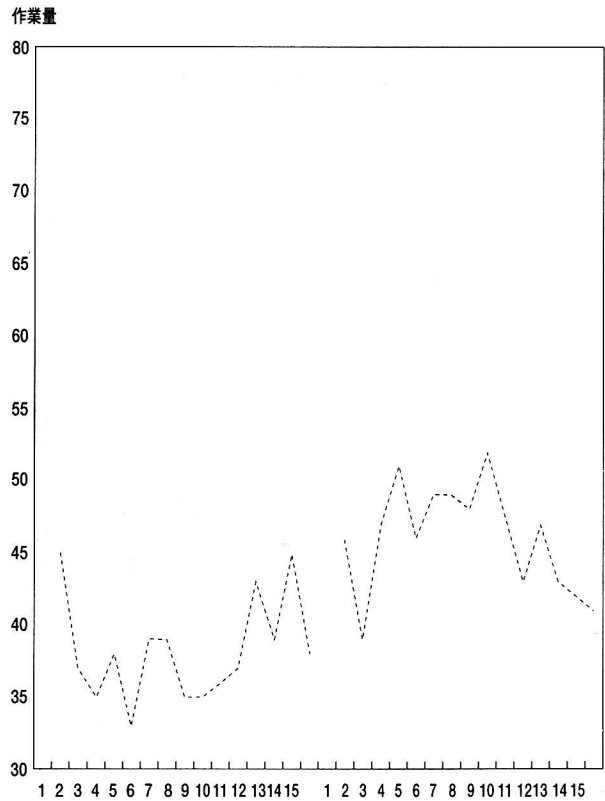


図8 case1 W選手 人柄類型 5
精神健康度 高 運動種目 ラグビー

この選手の競輪学校卒業時の成績は、75名中20番という適性組の中では飛び抜けて優れた成績を示している。（適性組に属した選手の多くは、同期の席次では50番以下である。）身体能力の特徴は、学生時代にはラグビー選手として活躍し、大学日本一になった時のメンバーであったことからかなり高い事が示されている。人柄類型は5「地道粘り型」に属し、精神健康度も高度である。卒業後4年間の競走成績は、373名全員の平均曲線に対し常に上位の成績を収めて推移している。これは、“地味にして目立たないが、やりとげるまで頑張り抜く粘り強さがあり、安易な妥協や協調はしない”という、人柄類型の特徴が大いに生かされている例であろう。

図9 case2) K選手 人柄類型8（分裂型）、曲線パターンB（当初は成績が低迷しているが、競走回数を重ねるにつれて成績が伸び、最近では平均より上位に移行している）、現在A級2班に所属

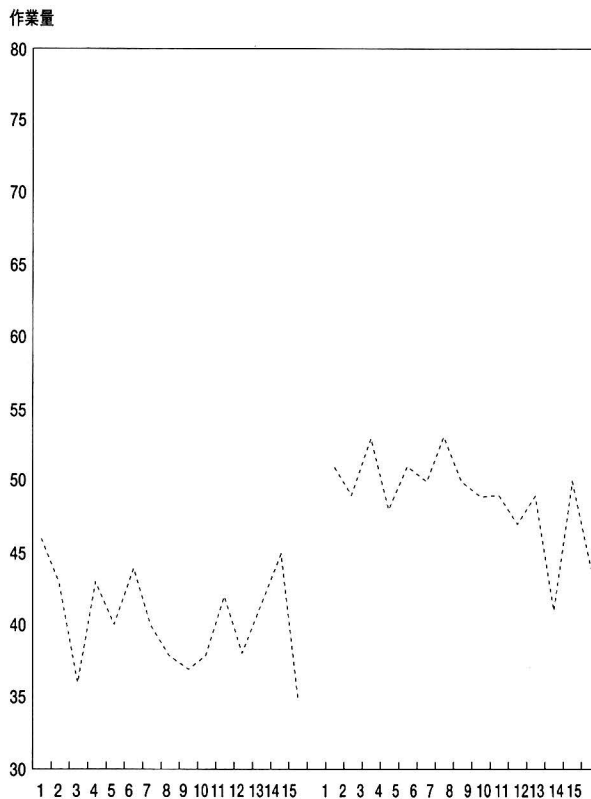


図9 case2 K選手 人柄類型8
精神健康度 中 運動種目 陸上

競輪学校卒業時の成績は75名中63番と決して良くはない。入学前の運動経験は陸上競技である。人柄類型は8「分裂型」で、精神健康度は高度である。卒業当初の成績は平均より下方で推移しているが、卒業後2年目の競走に入り頭角を現してきて、最近は常に成績上位を占めている。このことは、“冷静沈着で黙々と頑張り、ハデさはないが極めて意志は強固である”といったこの型の持つ性格特徴が成績向上に結びついているのではないかとと思われる。

4. ま と め

「競輪」という競技において、人柄類型と競走成績から、競輪選手としての向き、不向き(適性の有無)がどれくらいの関わりがあるかについて明らかにしようと試みてきた。今回は適性組の性格特徴について明らかにした。

1. 適性組の人柄類型特徴は「どちらかと言えば立ち上がりはやや遅いが、堅実で粘り強さを持ち合わせている選手が多く、選択性が強く個性を主張する選手も多くみられる。」
2. 精神健康度は「精神健康度の高い選手が多く低度者が少ない集団であるといえる。」
3. 競走成績は「実践デビュー当初は持ち前の体力勝負だけであり、成績は低迷しているが、自転車競走特有の競走技術を経験的に身につけることによって競走勝負に勝てるようになって来ていることが推察出来る。」
4. 競走成績の経年変化を全体平均値と比べると、5つのタイプ(パターン)に分類できる。その代表例2例を示した。

この論文要旨は日本スポーツ心理学会第28回大会(2001.11 慶応大日吉校舎)にてポスター発表した。

参考文献

- 1) 明石 正和・平田 聡, 他:『バレーボール選手の精神的変化に関する研究』日本体育学会第24回大会号, p344, 1973
- 2) 小林 晃夫:『人間の理解』東京心理技術研究会, 1971
- 3) 小林 晃夫:『精神健康度の意義とその判定法』曲線形第2巻, pp10-57, 東京心理技術研究会, 1976
- 4) 小林 晃夫:『曲線型の話』東京心理技術研究会, 1974
- 5) 小林 晋:『性格10類型による自己分析』東京図書株式会社, 1999
- 6) 中山勝廣:『スポーツにおけるUK法活用研究の動向と課題——日本競輪学校入学者のUK分析から』日本スポーツ心理学会第28回大会研究発表抄録集, pp128-129, 2001
- 7) 中山勝廣・藤江 学他:『大学生の性格類型と精神健康度についての研究』工学院大学共通課程研究論叢第38-1, pp151-162, 2000
- 8) 藤江 学・吉鷹 幸春:『スポーツ選手の精神的適性に関する研究』桐蔭論叢第4号, pp46-56, 1997

- 9) 星野 隆助：『柔道選手の精神特性』明治大学体育研究紀要，1974
- 10) 星野 隆助・長谷川宏一：『大学学生の性格特徴に関する研究』明治大学教養論集 117 号，pp133-161，1978
- 11) 星野隆助：『競輪選手の人柄類型と精神健康度について（その 1）』明治大学人文科学研究所紀要，第 48 冊，pp449-474，2001
- 12) 渡辺 隆嗣：『運動選手の精神特性』工学院大学研究論叢第 13 号，pp45-60 1975
- 13) 渡辺 隆嗣・中山 勝廣：『スキー技術習得と性格特性に関する研究（2）』工学院大学研究論叢第 18 号，pp273-286，1980
- 14) 渡部 岑生・小林 晃夫：『運動選手の精神特性（サッカー選手について）』日本体育学会第 22 回大会号，p122，1971
- 15) 渡部 岑生・小林 晃夫：『運動選手の精神特性（ラグビー選手について）』日本体育学会第 24 回大会号，p84，1973

（なかやま かつひろ）

（わたなべ たかし）

（ふじえ まなぶ）

（よしたか ゆきはる）

（ますじ かつゆき）

（ほしの りゅうすけ）

（たけのぶ たけし）

（くろだ かずとし）